

「起立ー礼ー。」

間延びした号令に無言で礼をして合わせると途端に賑やかになる教室。

部活に向かったり友人に帰ろうと声をかけに行ったりしてる中、私はホームルームの時からこっそり準備を終えてた鞆を手に持って教室を出た。

「…ただいま。」

砂利の引かれた駐車場を抜けて昔ながらの引き戸を開けると廊下の奥から小さくテレビの音が聞こえてくる。途中にある洗面所で簡単に手を洗うと音のする居間へと向かった。

「…ああ美青ちゃんおかえり。えらいまたはよ帰ったなあ。」

「…別に普通だよ。特に寄り道しなかったらこんなもんでしょ。」

「そう…?」

「…それより買い物は? 今日買い出しでなくていいの?」

「ああそうやった。待ってなさつきメモば書いたんやけど。」

確かこの辺に置いた…と曲がった腰で歩いていくおばあちゃん。

その後ろ姿を横目に鞆に入れていた財布とスマホを取り出すとおばあちゃんの後を追う。

食器棚の上の謎スペースに置かれたメモを見つけて手を伸ばすと「ありやそげんここにあった。」と笑い千円札を∞枚手渡される。

足が悪くなりつつあるおばあちゃんの変わりに放課後私が買い物に行くのはいつもの事。そして「お釣りは取るときなね」と続けるのもいつもの癖だ。シワシワの手から預かったお金を財布になおしつつメモを確認する。

「今日は煮つけんする予定やけん生姜ばお願いね。」

「魚はいいの？」

「ああ、魚は持ってきてくれるけんよかとよ。」

「持ってきてくれるって誰が？」

「陽太…って美青ちゃんは知らなかったかね？近くの漁協に勤めとる子よ。美青ちゃんの親戚になりたいね。」

…親戚。そんなのいたのか。

ここに来て一月ほどなるけど全然知らなかった。

正直親戚とかそういうのにいい思い出はないから思わず眉間にしわが寄りそうになるけど、「今日取れた魚ば持ってきてくるつとよ。楽しみねえ」と笑うおばあちゃんに心配かけたくないので「そうだね」とだけ返しておいた。少しだけ声が硬かったかもしれない。

私がここ玄海町に引っ越してきたのはまあ所謂身寄りが無くなってしまったからだ。

「事故で両親が死んだ。」

説明するとたった一言。数秒で済んでしまう。

けどこの理由を口に出来たことは一度もない。

両親が事故で死んだ時来てくれた親族は皆当たり障りのないお悔やみの言葉を告げてそれっきりだった。

だれも私の今後の話をしない。その話を切り出したら押し付けられるとも思ってるのか。

悲しみ泣いてくれた人もいたけどそれだけで、なんならさっさと帰りたいという雰囲気駄々洩れで、そんな人間にお父さんお母さんの最期を見送られる事に憤りすら感じた。

結局人のいい叔父さんが「……そういえば美青ちゃんの今後だけどね、」と告げてきたのがここ佐賀に居る母方の祖母の元に行くというもの。おじいちゃんも亡くなり一人暮らしの祖母がおいでと言ってるし、なにより寂しくないから…と。

「それがいい。」「環境もいいしきつと慣れる」とさつきまでだんまりだった親族が捲し立て、あれよあれよという間に私はこの町で潮風を浴びていた。

(…今思えば体よく追い出されたんだろうな。)

あんな親族と両親が上手くいってない事は子供ながらに分かった。

本音は住み慣れた町を離れたくなかったけど高校入学したばかりの子供には一人で生きてく力はない。結局大人のいいなりになるしかないのだ。

ふわり、と頬を撫でる風が潮の匂いがした。

そういえばここに来た時もこの匂いがした。というよりここはずっと風に匂いがある。少し顔の向きを変えただけで視界に入る海は西日が反射して目が痛いほど。たけどなんとなく見ていたくて、防波堤に手をつくとも目が痛くなくなるまでそのまま海を眺めていた。

「お帰り！遅かったなあーどこ行ってたん？」

「…は？」

扉を開けた瞬間聞こえてきた声に思わず素で混乱した。

そんな私の苛立った声にも臆することなく目の前の男は遅かったあの、待ってたただの話しかけてくる。

……え、待ってこの人誰？当たり前のように家の中にいるけど不審者じゃないよね…と

焦つてるとその男の肩に大ぶりのクーラーボックスがかけられてて、出る前に祖母と話していた内容を思い出す。確か…

「…えっと、陽太…さん？」

「おっ！知ってたんか！」

「おばあちゃんに聞きました。」

「そーかそーか！いやあ初めましてやな。藍原陽太や。」

「…：朝野美青です。えっとおばあちゃんは？」

「ああ美青ちゃんおかえり。遅かったねえ。」

「ごめんなさい…。」

大丈夫。それより陽太もきとったんね。」

「ひでえなばあちゃん！俺玄関から大声で呼んでたじゃん！」

「そうやったかねえ。近頃耳が遠くてね」

「美青の声には反応しといてかよ！！」

(…さりげに美青って呼んでるし。)

あまりに自分の親戚のイメージとは違っている。

あいつらがはじめと煩わしい湿気やカビだったらこの人はなんていうか…太陽みたいな人だった。

明るい金髪に屈託ない笑顔。働いてるんだからもちろん自分よりも年上のはずだけどなんだか見た目も相まって都会にいるヤンキーの高校生と言われても信じてしまいそうなほど。

「そーいや美青買物？」

「え？ああ…：ここにありませんけど。」

「よし、ならこっち持ってきてくれ。」

勝手知ったるというようにまっすぐキッチンへ向かう陽太さん。

おばあちゃんは何も言わなかったけど、もしかしたらたまにこうして家に来てたのかも知らない。

キッチンには既にきんぴらやおひたし、お味噌汁なんかの副菜が準備されていた。陽太さんはシンクに持ってきたクーラーボックスを置くと袖をまくり刃先の細い包丁を取り出す。あの中身は魚だね。…もしかして今から捌くんだろうか。

煮つけにするって言うてたし今から捌いてだと遅すぎる気もするんだけど…。荷物を置いて開けたクーラーボックスを覗き込むと、そこには両手で持ってもはみ出そうなほど大きな魚が氷水に浸かっていた。

「…っ、うわああ。すごい。」

「え、待てお前まさか金目鯛見るの初めてか!？」

「金目鯛ってあの高級魚の?」

「っははは、まあその認識で合つとは思うけどまさか高級魚って感想が最初に出るかあ」

「…仕方ないじゃないですか。あっちでは魚なんてここより高いんだし。」

正直こっちの相場を見た時二度見した。

スーパーに並ぶ魚がどれもすごく綺麗で、なのにあっちの半値近い値段。『玄海町は漁業が盛んで新鮮なものが買えるんよ』とパックを手にとった祖母が説明してくれた。

あとなんだっけ…農業も盛んだったっけ。初めて一緒に買い物に行った時に買ってくれたみかんがびっくりするほど甘くって、それ以来あのみかんの虜だ。あっちに住んだた頃は爪に薄皮が入るし汚れるからってあんまり好きじゃなかったのに。

陽太さんは金目鯛を取り出すとまな板の上に置く。

普通より少し細身な包丁…ではなく金属の謎の器具を取り出す。ブラシのような形で持ち手がついたそれは先がギザギザと荒い作りになっている。

それが何のために使うのか全然分からなくて凝視しているとふと陽太さんの顔がこちらを向く。私の視線を追うように顔を向けその視線が手元に向かっていると気が付いた瞬間「はあああ!??」と大げさにたじろいだ。

「っちよ、お前まさか鱗取りもしらんのか!??」

「鱗取り?」

「まつじかお前：おいばあちゃん！！美青やばいぞ！」

「っ、そんな言わなくてもいいじゃないですか！」

「っははは、えらい仲良くなったみたいやねえ。」

「おばあちゃん！」

その後も何かするたびに私の反応を見て大騒ぎする陽太さん。

「こんなことも知らんのか」「初めてとかまじか」なんて騒ぐ彼に嘔みつきつつも綺麗におろされた鯛が煮つけになるまでの間、私はなんとなくキッチンに残ったままだった。

「おー美青！今帰るかあ！？」

「っげ…。」

「おい聞こえとるぞこら。」

白昼堂々往来で人の名前を叫ばないで欲しい。

少し先を歩いていたおばさんがちらりと視線を向けるけど、その声が私に向けたものだと気が付くとさっさと車に乗り込んでいった。

その呼びかけた男はというとなにやら光沢のあるオーバーオールのような物を来てニコニコと手を振ってくる。蛍光オレンジとか攻めてるな…。

「なんや今帰るかあ？早いなー」

「別に普通ですけど。ていうか何その格好…」

「ん？ああこれ仕事着や。船に乗る時はこれくらい着とらんとびしょ濡れになるからなあ」

……なるほど。無駄に光沢ある生地だと思ったのはよく見たらビニール製のような物らしい。たしかにこれなら撥水してくれるだろう。

あの日から何度はうちにやってきては食事を取っていったけどこうして仕事着で会うのは初めてだ。

あの後おばあちゃんに聞いた話だと、やつぱり想像してた通り陽太さんはああしてたまにおばあちゃんの家の様子を見に来ては一緒にご飯を食べたりしてたらしい。陽太さんはおばあちゃんの家から車で15分程行った場所に住んでいて、職場も近いからその日に獲れた魚を持ってきてくれるんだと生姜の効いた煮魚をつきつつ話してくれた。

そんな風に今まで来てた彼を私が来たからと追い出す訳にもいかず、あの日から何度かああしてやって来る彼と食事をするようになった。

家に来る時は「シャツにパンツなんて格好ばかりだったから、こうして仕事着を見るのは初めて。というか外で声をかけられるのも良く考えたら初めてだっけ。…何となく落ち着かない。」

「…船にとって…ここ陸地ですけど？」

「アホ。船から降りた瞬間着替える訳ないやろ。漁協に行ってきた帰りや。」

「漁協…。」

「ん？分かんか？ここまーっすぐ行った所にある建物や。」

「……あなるほど。聞いた事があります。」

「それよりお前部活とかしとらんのか？」

「は？」

「帰り。部活とか入ったたらこんな早くないやろ。」

「……引越してきたばっかだし今から馴染むとか無理なんで。」

「……美青ちよっとつき合えや。」

「は！？」

突然何を言い出すのかこの人は。

焦ったような私の制止なんて聞きもせず、すぐ戻るから待ってけなんて言葉を言い残して道端にある建物へと消えていく。

数分後着替えたらしい陽太さんは荷物を持ったままこっちへ来いと手招きをしている。

「車。この裏やからこっち来い」

「車って…どこに行くつもりですか。私帰りたいんですけど」
「すぐ帰るし送ってくから。今日ばあちゃんとか行く予定やし買い物していけばよろ？ん？」

建物の裏に停めてある「台の車」。

私からさっさとカバンを受け取ると後部座席に乘坐始めたのを咄然としたまま眺めると駐車場に居たらしい男性陣が「つうお！」と焦ったような声をあげた。

「やっっぱ！！！！陽太が女子高生連れ込んでる！！！」

「マジ！？誘拐！？？」

「は！？？」

「っアホ！！！！美青は親戚の子や気色悪い妄想すんな！」

「っはははは、じょーだんじょーだん。」

「美青ちゃん？気いつけて帰り？」

「陽太も。また明日？」

「おー。」

「……はあ。」

乗り込んだ車の扉を閉めた瞬間包まれる静寂。

……うん。気まずい。そうよね、確かに地元民で昔から交流あったとかならまだしも今までいなかった女子高生が現れたら疑いもするよね。

陽太さん淫行疑惑とか出たらどうしよう…なんて、心配しているとそれまで無言だった彼が突然ふ、と息を漏らす。

その肩がフルフル震え出したかと思うともう耐えきれないとばかりに笑い始めた。

「…っ、ふ、…はははは何をそんな深刻そうな顔しとるん！」

「……陽太さん淫行疑惑かけられたらどうしようかなあって思っていました」

「あっはははははは！そいは困る！！！」

「さっきの人達職場の人ですか？」

「そーそー。同僚やな。」

「へー…ていうか本当にどこ行くんです？私あんまり遅くなると困るんですけど…」

「ばあちゃんが心配するって？」

「…まあ…はい。」

「それやったら心配いらん。むしろばあちゃんは早く帰って来る方を心配しとるで。」

「えっ…。」

予想外の返答に俯き気味に逸らしてた視線を彼に向ける。

運転中なのでちらりと視線だけこちらによこした彼は私の表情を見て安心させるように微笑んだ。

「…そんな深刻そうな顔せんでよかよ。」

「でも…心配してるって。」

「…『美青はこっちに来てやりたい事我慢しとるんやなかやろか』」

「え？」

「ばあちゃんが。美青こっち来て部活もせんとすぐ帰ってきとるやろ。もちろんばあちゃんも家の事とかしてくれてるし有難いとは思っとるみたいやけど、同じくらい心配してる。部活とか放課後遊びに行ったりとかしたい事我慢しとるんやなかかって。」

「……………」

「そこんところどうなん？」

ちゃんと学校生活楽しめてるか？なんてまるで父親みたいな事を言ってくる彼にいつもなら何言ってたんだこいつ…と突っぱねてただろう。

だけどもいつもニコニコ出迎えてくれてたおばあちゃんが人知れず心配してたなんて聞いて、私の頭はいつものようにきちんと回ってくれなかった。

人きり、誰にも聞かれる事もなければ見られることも無い車内というのもあったのかもしれない。

ここに来て初めて私は、私の心の底にしまい込んでた本音を音に乗せた。

「……慣れないんです。」

「ん？学校にか？」

「学校も。環境も方言も前いた場所とは何もかも違う。別に何かあるとかいじめられてるとかは無くて、でも同じくらい『何も無い』」

私が元々居たのは関西圏だ。

だから気を抜くと言葉の端々に関西弁のイントネーションが出てしまう。周りみんなと違う口調で喋るというのが高校生である私にとってどんなにしんどい事か。

それがあるからクラスメイトに自分から声をかけに行けない。

遊びに行くなんてもっての外だ。

まずこの辺りの地理も怪しいし、ここ的高校生がどんな場所に寄り道してどこで遊ぶのか、どんな名所があるのかだって知らないんだから私から誘えるわけも無い。

だから放課後学校が終わると早々に帰宅してたのに、それがおばあちゃんに心配かけてるなんて思ってもみなかった。

胸の奥の奥で淀んだ空気のようにジメジメ溜まっていた本音を一度声に出してしまうともう駄目だった。

陽太さんが途中何も言っただけのいい事に淡々と仕舞っていたものを吐き出していく。そうしてようやく私が動かしっぱなしだった口を閉じると、今度は陽太さんが「そっやなあ、」と呟いた。

(……呆れられるかな。)

いい歳して周りにも馴染めないなんて。

挙句こうして知り合ったばかりの親戚のお兄さんに愚痴るなんて…彼からしたらおばあちゃんの伝言役をしてたはずが突然愚痴られたのだ。焦りもするだろう。

なんて返ってくるのか身構えていると、小さく息を吸った彼は一瞬間をおいてもう一度「……そっやなあ」と呟いた。

「…おい、美青。」

「……はい。」

「今度出かけるか！」

「……………は???」

「いやだから方言慣れんのと地元について知らんから馴染めんとやろ？なら俺があちこち連れていったらええやん。」

「…いや、けど……」

「なんや俺とじゃ嫌か？？自慢やないけど俺割と詳しいで？」

「そうじゃなくて……」

「ああそれに俺とこうして話してたら方言もなれるやろ。ばあちゃんのはちよつと方言きついけん美青にはあんまりやしな！」

「そうじゃなくて！」

「ん？なんや他に何かあったか？」

「……陽太さんはいいんですか？こんな高校生のちっぽけな悩みの為に時間使って。もつと恋人とか家族とか色々過ごす相手居るんじや……」

「美青。」

空気が変わったのが分かった。

私の言葉を遮るように名前を読んだ陽太さんの声が固い。何だか怒ってるような空気に思わず萎縮すると何故かハツとした顔をした彼は焦った様子で視線を彷徨わせると目に付いたコンビニの駐車場に車を停め、先程より少し穏やかな声で「美青」と呼びかけてきた。

「ちっぽけな悩みとか言うな。お前が悩んでるならそれは十分大変なもので自分でちっぽけとか言うもんぢやうで。」

「……」

「あと一緒に過ごす相手やけど、お前は俺の家族やろ？親戚と一緒に暮らしてるわけや無くてそれでも家族や。」

「……っ！」

「あとついでに言っとくと俺に恋人はおらん！！！」

「っふ、あははは何それ自信満々に言うことじや……」

「おっ。ようやく笑ったな。」

「……ふふふ……陽太さんありがとうございます。」

怒られるかと思った。こんな悩み愚痴って呆れられるかと。

だけど彼は真剣に受け止めてくれて解決方法を模索してくれた。

嘆くことはいくらでも出来る。

だけどそれをしていたって何も変わらないんなら少しくらい自分から動いてみるのもいいのかなって思えた。その為に一緒に行動してくれるというのなら彼にお願いしてみるのもいいかもしれない。

突然やってきた親戚の子を迷わず家族と言ってくれる優しいお兄さんになら、これから悩みが出来ても素直に話せるような気がした。

……まあそんなこと照れくさいし言えないけど。

だからせめてこうして素直にお礼を言って頼ってみよう。

それからお互い何気ない雑談をしつつ適当に車を走らせてドライブをして夕飯の材料を買うためにスーパーに寄って。そうして家に帰ったのは今まで有り得ない程暗くなってからで、「遅くなつてごめん」と玄関を小走りでくぐる。

「おかえり、遅かったねえ」というおばあちゃんの表情が言葉とは裏腹に少し嬉しそうだったのに気がついてなんだが目の奥がツキン…と痛くなった。

初めて見た釣り堀は自分の想像していた釣り堀と全く違っていた。

海を一区画切り取るように枠組みで囲って周囲に人間が歩き回れるような足場を作ったそれは、その足場さえなければ本当に海そのもの。

快晴の青も相まって海がキラキラと輝いている。

木枠の足場もなんだか海を切り取る額縁みたいで思わずほお…つと息を吐いた。

「すごい…本当に海だ。」

「本当に海って…お前何を想像してたんや？」

「釣り堀ってプールみたいなところに海水と魚入れたものだと思ってた。」

「ははは、なら初見のインパクトは上々って所か？」

家に来た時も持ってたクーラーボックスを抱え直しながら陽太さんは笑う。

突然『釣りに行こう』なんて言われた時には何言ってるのと思ったけど、どうやら前に話した今度出かけようかという話を実行してくれたらしい。

『美青にはこの辺りの観光地を網羅してもらえな！』と連れてきたのがここだったという訳。

生まれてこの方釣りなんてしたことがない。

というかこっちに来て切り身じゃない魚を見るようになったくらいなのに私に釣りなんてできるんだろうか。

そう呟くと受付を済ませて釣り竿を手にした彼が「プロの指導があるんやから余裕やろ」とにやりと口角を上げた。

「そういえば何で釣り竿一つなんですか？」

「ああ今日俺は美青の補助やから。それに二人で釣ってたら帰り魚持て余すぞ。」

「えっ…」

流石というか陽太さんは慣れた手つきで準備を進めていく。

自分も習いつつ準備を手伝って、釣り針を垂らすとあとは待機の時間。陽太さんが持ってきてくれてた携帯用ベンチに腰掛けてぼんやり海を眺める。

(…凄い。私釣りに来てるんだ。)

自分が釣りに来るなんて想像もしてなかった。

餌にアジやエビを使うってことも初めて知った。

向こうに住んでた時は釣りなんて女子がするものじゃないって思ってたけど実際は子供連れも女性もちらほらいるし皆楽しそうに釣った魚と写真を撮ったりしている。

少しずつ、少しずつ自分の思い込みが覆されていくような気がした。

カチカチに固めて守って周囲からの言葉も受け入れないようにしていた私の心をゆっくり水でふやかすように、暖かな太陽の光で溶かすように。

親戚も人も信じれないという気持ちもそうだ。
最初こそなんだこいつって思っていたけどもう今は気を抜いたら敬語が外れちゃうくらいには気を許してしまった。おばあちゃんと過ごすのも当たり前になってきて前ほど自室に籠るようなこともない。

(……変わっていきけるのかなあ、私)

「…、おい…美青！」

「えっ!？」

「なにぼーっとしとん。釣り竿引いてるぞ！」

「えっうわ本当だ!!ちよっと待ってこれどうすればいいの!？」

「待て待てむやみに引っ張るな！」

突然肩を揺さぶられはっと手元を見ると確かに海に垂らしてる釣り針が水面にちょん、ちょんと沈んでいる。慌てて引っ張り上げようとした私の手を陽太さんの節ばった手が慌てて止めてきた。

そのあと背後からフォローしてくれる彼の手助けもあって小ぶりの鯛を釣り上げた時、疲労感もあったけどそれ以上に興奮と喜びが大きくなって、「ああこれが楽しくて釣りに来るんだな」と納得してしまった。

“楽しい”

…ああそうか私今楽しいんだ。

緩んだ口角が上がるのを止められない位には。

「…陽太さん。私今すっごい楽しい！」

興奮もあって思ったまま口になると魚から針を外していた陽太さんはぽかんと口を開け固まってしまう。

数秒の沈黙、ぱちぱちと何度か目を瞬かせたかと思うと「…っそうか!!」と顔をくしゃくしゃにして笑った。

いつもの様に居間で宿題をしているとなにやら大きめの手提げ袋を持ったおばあちゃんが「美青」と声をかけてきた。

「美青、今日はお風呂に行こうと思うけん準備しておいで。」

「お風呂…？え、何うちのお風呂壊れちゃったの？」

「あつははは、そうやなか。近くに温泉のあるけんねそこに行こうかと思って。」

美青行った事なかやろ、とほほ笑むおばあちゃんの手には既にバスタオルや着替えがあった。

開いたままのノートと筆記用具を片付けるとおばあちゃんの横に座る。

「陽太が車で連れてつてくれるとよ。」

「てことは今日も一緒に行くの？」

「そうやけど何か都合の悪かね？」

「…うん別に。」

一昨日も夕飯食べに来てたのに今日もとか、あの人思ったよりこっちに顔出す頻度多いな、暇なのか…とはさすがに言わないで聞いた。

一人暮らしのおばあちゃんの様子を見に来てくれていたって時ならともかく今は私もいるしそんな高頻度で来なくてもいいのに…と畳んだタオルを仕舞っていると「陽太は美青が来てからしょっちゅう来るもんねえ」と呟いた。……へ？

「あの人昔からこんなじゃないの？」

「いーや最近多かねえ。きつと美青が来て楽しかよ。こっちに若か親戚ほとんどおらんけんね。」

「…。」

「あれは頼つてやると喜ぶけん美青も沢山我儘ば言つて困らせんしゃいね。」

「っふ、ははは無茶ぶりだよおばあちゃん！」

「……おーい、二人共準備出来とるかあ？」

「っやば！」

間延びした声が玄関から聞こえてきて思わずおばあちゃんと二人目を見開いた。この声は恐らく…というより十中八九陽太さんだろう。思ったよりも早い迎えに私まだ全然準備してないと飛び出すと自室に駆け込んだ。

目についた袋に着替えを適當に突っ込むと玄関先で慣れた様にしやがみ込んで待機している陽太さんがスマホを弄っていた。

『あれは頼つてやると喜ぶけん…』

…ふとさっきの話を思い出して袋を投げつけてみる。

突然鞆が飛んできた事に情けない悲鳴を上げて飛び起きた。

「…っころあ美青なにすんねん！」

「それ車に乗せといてくださーい！」

「頼み方どうにかせんか！」

「ほらほら二人共はよ車乗らんね」

目をつりあげて怒鳴るけどその手ににぎっているのがパステルカラーのバックなのがミスマッチ過ぎて思わず吹き出してしまふ。

それにまた噛み付く陽太さん。そしてそんなやり取りは「ええ加減にして車に乗らんね」というおばあちゃんの声が聞こえるまで続いたのだった。

◇

『玄海海上温泉パレア』という看板と共に迎えてくれたのは白を基調とした大きな建物。案内板を見てみるとここは海に張り出すようにした露天風呂が有名らしく大きな写真と共に効能効果、その他施設案内が受付横のパネルに張り出されていた。

「時間後に休憩用の大広間で集合を約束しおばあちゃんと〆人女湯へと向かう。さつと体と髪を洗うとずらりとならんだお風呂の前でどれに入ろうかと悩んでしまうほど多種多様なお風呂が揃っていて圧巻だった。

…でも最初はまず「一番有名なやつだよね、とおばあちゃんを引き連れて外へと向かうとテラス状のスペースに露天風呂があつて既に数人気持ちよさそうに湯につかっていた。視線の先は直ぐに海だ。

すごい…本当に海に突き出るように作られた温泉になつてる。

ゆったり足を伸ばして浸かると視点が低くなった事もあつて更に海に浮かんでいるかのような気分になる。頬を撫でる潮風と心地よい温度の温泉。ゆったり伸びた体を解すようにマッサージしつつしばらく黙つてその風景を楽しんだのだった。

「おかえり。どうや気持ちよかったやろ？」

「あつ、ずるい何飲んでるの？」

「風呂上がりつていたらこれやろ。コーヒー牛乳」

こつくりとした丸いフォルムの瓶にレトロなパッケージのシール。掲げるように見せてきたかと思うと荷物の横から同じ瓶を〆つ取り出した。

「つは普通の牛乳になつてるのはおばあちゃんの分なんだろう。

お礼を言つてコーヒー牛乳を受け取るとそのまま固まった。

瓶には蓋がされていた。

いやもちろんそれは当たり前なだけど蓋の部分には飲み口をピッタリ埋めるような紙の円。

「はははやっぱり知らなかったか！」

「えっ…何これどうやって開けるの？」

「ああそいはピック使って開けるとよ」

「ピック？」

そういうとおばあちゃんは未だニヤニヤ笑いが止まらない陽太さんから何かを受け取る。アイプチくらいの大きさの持ち手に小さな針が付いたそれを蓋の部分にグツと刺し込むとそのまま栓抜きを要領で簡単に空けてしまった。

ポンッ…という軽い音。あまりに簡単に開いた蓋にぼかんとするとその顔が面白かったらしく手に持ったコーヒ―牛乳が波打つ程肩を震わせた陽太さんが笑い声を上げた。

「っ…ひゃっははははお前…美青あほ面やなあ？」

「うるさい！！！」

「なんやお前ぼっかーんって口開けて…っ、はははは！」

「してません！！！」

「いーや今までなってたで。」

「してないってば！」

その後食事をしようとレストランに行ってから何かにつけて「あの時の顔が」とか「見物やった」とか弄ってきた。

あまりに鬱陶しいので「そんなに笑うのに忙しいならこれ代わりに食べてあげるね」と佐賀牛のステーキに手を伸ばすと慌てて皿を離される。

やり取りだけ見たら年の離れた兄妹にでも見えるかもしれない。

実際やりとりなもうお互い遠慮のないものだし、ああやって笑われても本気で馬鹿にしてる訳じゃないと分かる。

私に兄妹はいなかったけど、実際お兄さんがいたらこんな感じなのかも。

「美青、これ美味しいから食ってみ。」

そう言つてステーキを「切れ皿に乗せてくる陽太さんはさっきまでのニヤニヤした顔ではなくて美味しい物を共有しようとするお兄ちゃんの顔だった。…その顔が少し格好良く見えたのは秘密だ。

「ねえねえ朝野さんつてお兄さんおると？」
「えっ？」

そう声をかけてきたのは同じクラスの子達だった。
顔は知ってるし名前も知ってる…けどそれだけ。
特に仲良くもないし話すのだって授業中とか必要な時だけ。そんな子が突然話しかけてきたもんだから驚いて端的な返事になってしまった。
さすがに無愛想だったかも…と慌てて「なんで？」と付け足す。
すると話しかけてきた子が「この間見たんよ」と続ける。

「この間。バレアに居つたら？」
「…ああ。」

この間。バレアに行った時に見かけたらしい。
たしかに賑わつてたしあの中に同級生がいても不思議じゃない。
ということはお兄さんと間違われたのはやっぱり陽太さんか。確かに知らない人から見たらお兄さんと思うのが自然だし。

「…違うよ。あれ親戚のお兄さん」
「えっそうなの？へえ、仲良いんだね。」
「仲…良いのかなあ。」
「はははっ何それ仲良いんじゃないの？」
「まあ普通かも。よくおばあちゃん家にきてるんだよね。」
「じゃあ一緒にいたのおばあちゃんなんだ。よく行くと？」

「ううん初めて行った。…いい所だね景色も良くて。」

「やろー？気持ちいいもんね！」

「…えつと…牧さんもよく行くの？」

「うん！私のじいちゃんあそこで働いてるから。」

「えつ、そうなの？」

「うん。レストランあったでしょ？だから家族ともよく行くんだー」

併設されてたレストランは佐賀牛を始めとして地元の野菜を使っただけあつて凄く美味しかった。あの時も陽太さんのステーキを貰ったけど「お肉がとろけるとはこの事か…」と内心感動したし。

初めて魚を食べた時もあったけどここは食べ物が本当に美味しいと思う。なんかこう…太陽の光とあの心地よい潮風を浴びてぎゅっと元気を貯め込んでみたいな。

そこで親戚が働いてるなんてすごいね、と何気なく告げると

牧さんはぼかんとした表情を一瞬、けれど直ぐに頬を緩め嬉しそうに「ありがとう」と呟いた。

「…ちよつと驚いちゃった。朝野さん意外と話してくれるんやね。」

「…え？」

「私達が話さないと全然声掛けてこないやん？帰りも直ぐ帰るし。」

「あつ……それは、」

「あつごめんね！別に責めとるわけやないんよ。色々忙しいやろーし…けど今日ゆつくり話してきて嬉しい！」

「朝野さんって美青って名前やったよね？『美青』って呼んで良い？」

「…っ！う、うん。私もその…名前でも呼んでもいい？」

「もちろん！」

牧さんと一緒にいた子の「人がすつとじゃがりを差し出してくる。

いつの間に持ってきたのか、ポッキーの箱と共に机の上に置くと「先生にバレたらヤバイけん証拠隠滅手伝って」と悪戯っぽい笑みを浮かべてきた。

禁止されてるのにお菓子持ち込むのも、そのくせに先生が怖いのもどこの高校生も変わらないらしい。思わず吹き出して「じゃあ貰うね」と手を伸ばすと一緒にいた子達もワイワイ話し始めながら一斉にポッキーの箱に手を伸ばした。

◇

『ありがとうね。』

そうメッセージが送られてきたのは夕方の事。仕事が終わりに車に乗り込もうとしてたらポッケで震えたスマホには美青からで、ただ一言それだけが送られてきた。

(…なんなんやこれ…。)

何に對してのお礼なのか。主語を付ける主語を。

なんて返したらいいのか全く分からないがとりあえずお礼を言われてるならと『どういたしまして』とだけ返してみた。

既読が付いてそれ以降メッセージが続かない所を見るに会話を続ける気ないらしい。

最初の頃こそ遠慮がちだったし警戒されてたけど、最近の美青は良くも悪くも遠慮がなくなつた。それが家族に見せる素の表情なんだろうなと思えばそんな生意気さも可愛いものだけど。

突然両親が亡くなって親戚にも適当な理由つけてこちらに寄越されたと聞いた時はあまりの仕打ちに怒りすら覚えた。

都会に住む遠縁の親戚達は美青の両親と折り合いが悪かったとは聞いているけどそれにしても酷すぎる。

『あつちで辛かった分こつちで癒してやらなあ』と先に送られてきた荷物を片付けながら呟いたばあちゃんの声を聞いて、気がついたら「俺も手伝うから」と続けていた。

幸い玄海町にはなんでもある。

潮の香りがするすっきりと澄んだ空気は胸に詰まった怒り悲しみなんかのモヤモヤを濾過してくれるだろう。

ひらけた空から降り注ぐ太陽の光と力強く吹く風が、疲れた身体にエネルギーを与えてくれるだろう。

美味しい食べ物が心も身体にも活力を与えてくれるだろう。

そんな風にこちらに來たら少しでも早く元気になってくれればええな……と思った。「大丈夫や、ここに來たらすぐ元気になる」と励ますように告げれば氣落ちしていたばあちゃんも少しだけ笑みを浮かべた。

その為には自分もできる事をしないと。とりあえず美味しい魚を持って顔を出す事から始めてみるか。

……懐かしい。美青がここに來る前の事を思い出しつつ車を走らせていると道の向こうに見慣れた制服の子達を見つけた。

あれはたしか美青が通う高校の制服。なにが楽しいのかキヤラキヤ楽しげな笑い声をあげ歩く女子集団を若いなあ……なんて眺めてると、その中に見知った横顔を見かけて思わず目を瞬いた。

あれは美青だ。プリーツスカートを翻して「人歩く姿を何度も見てきたのだから間違えるわけも無い。

いつも淡々と歩く彼女は友人達と楽しげに笑いあっている。

向こう側は家に帰る道ではないからあの子達とどこか寄り道してくるのかもしれない。

(……そうか。友達出來たんか。)

さっきの『ありがとうね』という言葉の意味はまだよく分からないけど多分さっきの子

達関係な気がする。もし自分の行動のどれかが彼女の笑顔を作れたのならそれはとても嬉しくて、そして誇らしい気分だった。

「……………お————い!!!美青!!!!」

「っうわびつくりした!陽太さん今帰りー?」

「おーー後でそっち寄るわ!遅くなるなよー!!!」

「了解————!」

潮風に髪とスカートを靡かせ、手を振り叫ぶ姿は今まで見たどの姿よりもこの町に似合っている気がした。

さてと、とりあえずばあちゃんに今日見た物を教えてやろう。

『今日美青は遅くなるかもやで』と告げれば、シワの寄った目元をこれでもかと緩めて安心したように「そうかぁ。」と笑うんだろう。

クーラーボックスに入れた鯛をあの日と同じ煮魚にしておこうかなんて考えながらニヤけた口元を隠すために一撫でして車を走らせた。